

使い捨てをなくすための製品 ～家庭内のゴミを抑制する製品の提案～

A2201503 荒家 舞

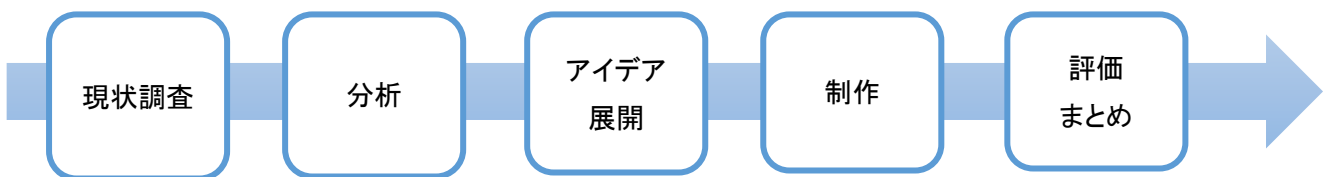
研究の背景

近年、豊かさゆえに大量生産・大量消費・大量廃棄が問題視されている。日本は、年間一家庭から1～2トンのゴミが出ており、ゴミ焼却量は世界ダントツである。中でも、家庭から出るゴミの中では包装紙や食品トレイ、パックなどの容器包装が多い。容器包装は平成27年度の環境省の調査によると、全国的に容積比率だけでも半数以上の55.1%にも及んでいる。また容器包装については2000年に容器包装リサイクル法が施行され、基本的には容器包装の資源化が図られている。しかし、実情は自治体が負担するコストが増加し、財政を圧迫する等の問題もあり、資源化はあまり進んでいない。このような状況の中、ゴミ問題の解決には、その発生源である、家庭での対策が必要と考える。

研究の目的

現在の大量生産・大量消費・大量廃棄について見直すきっかけを作るとともに、家庭内のごみの発生を抑制するために愛着を持って、長く使えるものへ再利用・転用できる容器包装を提案することを本研究の目的とする。

研究のプロセス



Web、文献をもちいて現在の具体的な問題点、その原因を調査した。Web調査では、容器包装の問題を調査し、ネットショッピングや食品トレイなど過大包装が問題視されていた。文献調査では、使い捨てをなくすために愛着についての調査を実施した。

調査した結果、容器包装の多くは過大包装が行なわれており、そのほとんどが家庭ゴミとして捨てられている。過大包装は一見綺麗に包装されていて豪華に見えるが、適正包装の基準を超えており、資源の無駄遣いといえるだろう。世界で比べてみると、過大包装が問題視されているのは日本だけである。日本の包装は丁寧で綺麗といわれているが、無駄な包装が多いともいわれている。

最近では、日本で包装紙を捨てることなく使用する新たな活用法として、封筒やブックカバーといった私たちに身近なものに活用されている。

しかし、木箱などの容器包装を見てみると包装紙よりはリメイクされる量が少なく、ゴミとして出されるケースが多い。また、木箱の処分に困っているという人もいるようだ。これらの事を受け、木箱を利用した新たな活用法を提示したいと考えた。

また、使い捨てをなくすために物を長く使用してもらう点に着目した。そこで長く使用してもらうために愛着についての調査をした。調査の中で千葉大学大学院教授青木弘行先生にお話を聞く機会があり、愛着について聞いて

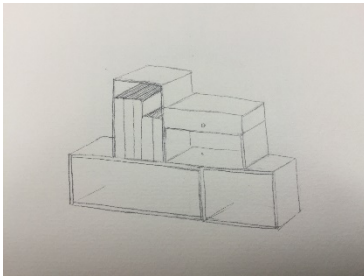
たところ、温もり・一体感・愛おしさ・親しみやすさなどの、感性要素が必要である。同じものでも状況によって変えていけるものが愛着を持つことができるとおっしゃっていた。

また、青木先生の論文によると、ものを長く使用したくなるためには使いこなすことが重要になると述べている。その中で飽きがこないで大切に使い続けたいと感じさせ、手に馴染む使い勝手のよい機能の実現が必要となる。また、温もり・親しみやすさなどの、感性要素も必要となると述べている。

これらのことを踏まえ、使い捨てをなくすために製品を製作するに当たり、愛着が持てる製品の制作を考えた。

成果物(完成作品)

人から頂いたり、お土産で買ってきたりしたワインの瓶の木箱やお皿が入った木箱などの小さいサイズの木箱を利用し、組み合わせて大きな家具にするといった、組み合わせ次第で何通りもの家具ができるようにした。いわゆる、レゴブロックのように組み合わせて小さい木箱を大きい家具にしていく。



完成イメージ



使用する木箱のイメージ

考察

この研究を行うにあたり、日本では今もなお大量生産・大量消費・大量廃棄が問題視されており、中でもゴミ問題は環境問題に大きく関与している。その中で私たちができること、それはゴミ発生を抑制することだと考える。ゴミ発生を抑制するために、発生源の大本である家庭ごみを減らすことから考えるべきであると今回の研究から再認識した。普段何気なく捨てている、容器包装であるが一人ひとりの捨てている量を合わせると、膨大な量になってしまう。そこで容器包装のごみを出さないために一番大切なことと思われるのは、無駄なものは買わないことと考える。無駄な買い物を減らせば、ゴミ発生の抑制につながり、ゴミ問題も減少するのではないかと考える。

世界では容器包装のごみ問題についての対策が進んでいる。特にヨーロッパではごみ問題の取り組みは積極的に行われている。ドイツではあるスーパーが食品を包装しないで、量り売りで販売している。デンマークでは、一回限りの使い捨て食器類などに、30%以上のもの税金を科すなどをし、対策をとっている。日本もこのように大々的に行っていくべきなのではないかと考える。

また、調査の中から長く使用してもらうために愛着を持ってもらうことに着目したが、愛着といっても人それぞれの感性の問題があげられる。その中で使う人がどれだけ愛着を持つことができるのか、愛着のすべての要因を兼ね備えて製品を制作することは難しいと実感した。しかし、愛着がわくだけで、ものを長く使用することができ、大事に使用するという気持ちが出てくるのではないかと調査して思った。

今回製作した作品でゴミ問題を考えるきっかけになってくれたらと思う。一人ひとりがゴミ問題について向き合うことにより、環境問題も改善の糸口が見えるのではないかとと思う。